

小室翠雲は明治7（1874）年、栃木県館林町（現群馬県館林市）に生まれた南画家として知られます。精力的な作画活動とともに、文展や帝展の審査員や日本南画院同人、そして帝室技芸員などといった美術界の要職を歴任し、南画の振興を目指した日本南画院や、南画鑑賞会で中心的なメンバーとして活躍しました。

江戸時代に広く大衆に愛好された南画は、明治になるとフェノロサによる批判から「つくね芋山水」と揶揄され、衰退していきます。しかし、明治末頃には西洋的な価値観によって再び見直され、新しい南画を模索する動きが起こりました。南画をとりまく振幅の激しい情勢の中で、「新派」の画家や「新南画」と対立的に語られ、保守的な「旧派」の代表とされる翠雲ですが、彼の作品からは、伝統に甘んずることなく新たな表現を追求していたことがわかります。明澄な彩色が印象的な《春雨蕭々^{しゅんうしゅうしゅう}》では、展覧会場に映える大画面に奥行の浅い明快な構図、雨足を描くなど写実的な表現が見られます。伝統的な南画を基礎に、現実感に富む画風を確立した翠雲は、他画家たちに多大な影響を与えました。展覧会や美術団体といった近代の新しい手段、場を積極的に活用し、「旧派」を率いた彼はまさに近代の、そして最後の南画家であったといえるでしょう。自覚的に南画家として在り続けた翠雲の作品をご堪能ください。

№	作者名	作品名	制作年	技法材質・形状	寸法（縦×横cm）	備考
1	こむろすいうん 小室翠雲	しゅんうしゅうしゅう 春雨蕭々	大正9（1920）年	絹本着色・幀装 （六曲一双屏風）	各168.0×373.2	
2		さいれんしよくきん ず 採蓮触禽図	大正8（1919）年	絹本着色・軸装	124.0×50.0	
3		ごせきへき ず 後赤壁図	昭和6（1931）年	絹本墨画・軸装	131.5×27.4	
4		さんすいずびょうが 山水図屏風	大正12（1923）年	絹本金地墨画淡彩・幀装 （六曲一隻屏風）	168.8×373.8	
5		けんこんだいいっぼう 乾坤第一峰	明治43（1910）年	絹本着色・軸装	115.0×201.0	
6		とがくしよけんじゅうにだい 登嶽所見十二題	昭和3（1928）年	紙本墨画淡彩・軸装 （十四幅対のうち四幅）		
		はくひょう （2）白雲			45.0×74.0	
		うんかい （5）雲海			45.0×74.0	
		ぜつれい （6）絶嶺			45.0×74.0	
		おくみや （8）奥宮			45.0×74.0	
7	さんしれい 三枝禮		昭和11（1936）年	紙本着色・軸装	116.0×145.0	

* 作品保護のため、会場内の温度、湿度、および照度を調整して展示しています。
また、都合により展示作品を変更する場合がございます。ご了承ください。

【次回予告】「戸方庵井上コレクションのすべてⅠ・Ⅱ」 9月21日(土)～10月14日（月・祝）/10月16日（水）～11月10日(日)
企画展「開館50周年記念 群馬からみる日本の美 戸方庵井上コレクション5つの扉」の開催にあわせ、戸方庵井上コレクションの作品をご紹介します。